三斎流
九曜会だより

発　行
三斎流九曜会
会長　小林祥泰
事務局　出雲市今市町53

平成の大遷宮奉祝
家元森山宗浦宗匠御献茶奉納
御本殿遷座祭奉祝行事に於て

６０年に１度の遷座祭奉祝行事に宗浦家元様が御献茶奉納され、三斎流にとりましてこの上もない慶びであり、家元様に対し会員一同心よりお祝い申し上げます。

三斎流献茶・奉納舞の家元様、桜間様

お献茶点前を始められる家元様

お抜いが済みこれからお献茶点前です

奉納舞 金春流シテ桜間右陣様

観翠庵道場
築五十周年記念茶会を開催

■日時 平成二十五年五月二十五日(土)
■会場 観翠庵道場・ホテル武志山荘

今年度は道場築五十周年という誠に記念すべき年に当り、奇しくも出雲大社「平成の大遷宮」六十年に一度の御修造「本殿遷座祭」と同年に慶祝行事を執り行うということは三斎流にとりまして誠に光栄であり、この上もない慶びであります。この慶事を心に刻み会員一同三斎流発展と隆盛を願う記念の茶会となりました。

床　細川重賢公御筆一行「後庭花」

後見 家元様
お点前 松尾牧子さん

濃茶席床飾り　50年の歴史を感じる

書院 新畳に青竹の結界がすっきりと

島根県知事様はじめ沢山の来賓の方々をお迎えし盛大に

席入り前に
富士の間にて
お菓子を召し上がって頂く
(紅白上用・いしばら製)

濃茶席にて

桜間様、溝口知事様、佐々木県議、江田会頭様

濃茶の水屋は私達にお任せ下さい!

一畑寺管長様他来賓の方々

記念事業の一環として道場の一部改修工事を実施

記念の改修工事が無事完了いたしました。
白壁の塀、清々しい青畳、新緑の四ツ目垣、等々立派に整った道場にて　厳粛且つ盛大に開催出来ましたことは　会員皆様方の深いご理解ご協力の賜ものと衷心より厚くお礼申し上げます。誠に有難うございました。

壁周辺の手入れ　忘路軒入口門

壁周辺修理・新畳替えした松霞亭

護立公御筆「忘路」　忘路軒

改修された白塀が爽やかな

清々しい緑に白塀がみごとに映えて

50周年記念
楽山窯 数茶盌
50個購入

ご寄贈賜る
九曜紋入り幕2張り
小林会長様より
ご寄贈頂きました
御礼申し上げます

主な改修工事内容

- 塀改修・新畳替、表替
- 四ツ目垣・トイレ改修
- 白蟻駆除・障子貼替・造園他

薄茶席〈山茶花の間〉 点心席〈三階大広間〉 ホテル武志山荘

華やいだ雰囲気の点心席

遠路東京、京都方面より

床　細川怡圓公　千宗左合筆　松竹梅二寿

遠路名古屋方面より

薄茶席はやや和やかな雰囲気

三斎流と天下の名香「白菊」

和田 貞夫

◆名香木の香り

天下の名香と言えば、正倉院に伝来する「蘭奢待」であるが、それに劣らぬ名香木が細川家に伝わっている。

最近、旧友から昭和四十九年十月二十七日東京椿山荘で開かれた細川三斎公三百三拾年忌記念茶会の会記を頂いたが、会記には

・主　細川護貞
・導師　山田無文老師
・献茶　出雲観翠庵　森山祥山
・献香　東京聴松庵　高樋宗其
・香　勅銘　白菊　細川家伝来

と記されている。

これに先立って、昭和二十九年東京国立博物館で細川三斎公三百十年忌記念茶会が開催され、高桐院の上田義山老師が導師となり名香「白菊」の香りが場内にあふれる中で観翠庵森山祥山宗匠が御献茶のご奉仕を行い・その功により細川護貞公より三斎流家元の認可を賜っている。祥山宗匠は、二度にわたって名香「白菊」の香る中で御献茶のご奉仕を行っており、三斎流にとっては忘れることのできない記念すべき名香である。

その名香木が「細川忠興と香木・蒔絵香道具展」と題して永青文庫で開催されると知って、筆者は平成二十四年の初夏、久方ぶりに武蔵野の面影を今も留める東京目白台の永青文庫を訪ねた。

展示の中心は言うまでもなく天下の名香木「白菊」であるが、それは想像以上に大きい携帯用の枕にも利用できそうな沈香と言われる香木であった。沈香は文字通り水に沈む重いもので、中でも最上質のものが伽羅と呼ばれており、「白菊」は伽羅である。

香木「白菊」(伽羅)

◆香木の歴史

推古天皇三年、淡路島の海岸に大きな流木が漂着し島人が火に焚いたところ遠く迄香煙が香り、驚いた人々が朝廷に献上したのが、わが国の香木の歴史の始まりであると日本書紀に記されている。

香木には沈水香（沈香）と白檀など栴檀系の樹木の二系統がある。沈香は東南アジアやインドに生産するジンチョウゲ科の常緑樹で木そのものに芳香はないが、幹の傷などによって樹脂がしみ出して沈着し、その木が長年地中に埋もれるなどして変質、硬くて黒い香木となる偶然の産物で希少価値が高い。一方の白檀など栴檀系のものは、木そのものが香り特に中心部の材が珍重されている。

香には、仏前に供える「供香」部屋や着物に香りをつける「空だき」香りそのものを楽しむ「玩香」の三種類がある。

仏教の伝来とともに、仏を供養するために香を焚くようになるが香は、儀式の場を清めるときにも使われた。平安時代に入ると生活の中にも入って貴族は、室内や衣類等に香を焚きしめて香りを楽しんだ。源氏物語には、香にまつわる話がたびたび登場している。

王朝貴族から武家の世になると香の文化にも変化が見られ、香は力の象徴になっていく。貴重な名香を手に入れ銘を付けることが権力の証となっていった。

足利義満や織田信長は、正倉院伝来の名香「蘭奢待」を取り切って力を誇示し、婆娑羅大名として知られる佐々木道誉は、花見の宴で高価な香木を大量に焚いて人々を仰天させたという。徳川家康も南ベトナムやタイの王国に手紙を出して伽羅を求め、多くの香木を所有していた。

江戸時代に入ると香は、上流子女のたしなみの一つとなり数種類の香を焚いて香りを聞き、同じ香りを当てる組香が流行し、豪華な香道具が作られた。

永青文庫の展示場では、細川家に関わる女性が所有していた贅を尽くした香道具の数々を見ることができた。

◆香道「志野流」「御家流」

足利義政から香木の整理分類を命じられた志野宗信は、産地や香りによって「六国五味」に香木を分類し、香を聞く作法を体系化して香道「志野流」を開いた。

宗信の香の師が、公家の三条西実隆で和歌や古典に通じ古今伝授を受けた文化人で足利義政と親交があり香道「御家流」の祖となっている。この二つの流派が現在まで続いている。

◆細川三斎公と「白菊」

細川家に伝来する香木「白菊」は、最も上質な伽羅と呼ばれる沈香の香木で細川忠興（三斎）が入手したもので、納める外箱の蓋に「寛永元年伽羅白菊名之」と書かれている。

当時、武将間では香道が流行し大名達は東南アジア産の香木伽羅

を競って求めた。忠興も家臣を長崎に送って買い求めようとしたが、伊達政宗の家臣と競い合いとなり、この競争に勝って入手したのが名香木「白菊」である。この辺のエピソードを明治の文豪森鴎外が「興津弥五右衛門の遺書」という小説に著述している。

目白台の永青文庫

◆「興津弥五右衛門の遺書」

明治四十五年、明治天皇崩御と乃木希典大将の切腹自刃による殉死事件が、封建社会における純粋な日本的武士道行為として森鴎外に大きな衝撃を与え、小説「興津弥五右衛門の遺書」を書かせたと言われている。

細川忠興の命を受けた家臣の沖津弥五右衛門と横田清兵衛の二人が長崎へ伽羅の香木を買いに行くが、同じ伽羅を伊達政宗の命によって買いに来た仙台藩の家臣と競い合いとなり、香木の値が上がってしまう。

弥五右衛門は、大金を投じてでも主命に従うべきであるとして買うとするが、清兵衛は武具ならいざ知らず炉にくべる木ぎれに大金を投ずるのはどうかと反対する。言い争った結果、弥五右衛門は清兵衛を切ってしまう。

こうして伽羅を手に入れた弥五右衛門は帰って主君忠興に事の顛末を報告し、主命大切と言いながら家臣一人を討ち果たしたので切腹を願い出る。しかし、忠興は願いを許さず彼の忠義をたたえ、沖津を興津とする様にと忠興の一字を与えたのであった。

その後、弥五右衛門は、忠興の没後十三年忌に高桐院の墓前に詣で切腹、殉死した。

この小説の執筆以後、鴎外は歴史小説の世界へ進み「高瀬舟」「山椒大夫」等の名作を発表する。中でも「阿部一族」では、細川家の殉死事件を題材とし、「初音」という名香が登場する。細川忠利の死に対し殉死が禁じられたのに阿部弥一右衛門が切腹して事件となり、竹内数馬が髪に忠利拝領の初音の香を炊き込んで、阿部家へ討ち入りするのである。

◆一木三銘の名香木

入手した伽羅の香木に忠興は、次の和歌に因んで「白菊」と命銘した。

たぐひありと誰かはいはん
　末匂ふ　秋より後の白菊の花

寛永三年、後水尾天皇の二条城行幸の際、忠興は「白菊」の一部を切り取って献上したが、天皇は早速和歌の中から「初音」の名をとり命銘されたという。

きく度に珍しければ郭公
　いつも初音の心地こそすれ

また、忠興の子忠利は、香木入手のライバルであった伊達政宗にも一部を譲ったが、政宗はこの香木に次の和歌に因んで「柴舟」と銘した。

世の中の憂きを身につむ柴舟や
　たかぬさきよりこがれ行らん

こうして一本の香木に「白菊」「初音」「柴舟」と三つの銘が付けられ、一木三銘の名香木と称されたのであった。

三銘の他に、「ふじばかま、蘭」と「初雁」の銘もあって、その中の一つを入れて一木四銘といわれることもある。

命銘者と銘の組み合わせについては諸説あって、森鴎外の小説では忠興が「初音」後水尾天皇が「白菊」と命銘したと書かれているが、細川家の資料では、はっきりと忠興が「白菊」と銘したと記されている。筆者は、鴎外が天皇に敬意を表して記述したものと推測している。

椿山荘での記念茶会の会記には、香・細川家伝来、勅名「白菊」と記されていた。外箱の蓋には、「寛永元年白菊名之」と書かれており後水尾天皇への献上は寛永三年であった。

◆「白菊」の香り

名香木「白菊」は、大きな錫製の筒箱に納められ四百年にわたって細川家に伝えられてきた。筒箱の蓋裏の記録を見ると、多くの人に一部が切り取られて譲られ、焚かれていることがわかる。

・寛政十二年　田安家
・文化　二年　島津家
・文政十一年　井伊家
・明治四十四年　細川家一門興増
・昭和二十四年　昭和天皇熊本県行幸の際、八代の松井邸に天皇をお迎えし、細川護貞公が一部を切り取って焚いたと記されている。

展示場の学芸員の説明では、昭和二十四年の切り取りが最後ですとのことであるので、二度の細川三斎公遠忌の記念茶会で焚かれた香は、この時に切り取られた一部かと思われる。

細川護貞公は、今でも蓋を開けると、さわやかな香りが漂うと語っておられるが、展示場では筒箱から出された「白菊」を直接拝観することはできたけれど、ガラスケースの中に納められていて残念ながら筆者は、香りを聞くことはできなかった。筆者が、どんな香りがしますかと尋ねると、学芸員は「それ自体は、ほとんど香らず焚いてみないと香りはわかりませんが、さわやかな香りが漂うと言われています。」との説明であった。

それにしても多くのエピソードに包まれた名香「白菊」の香りが漂う中で、二度にわたって御献茶の御奉仕をされた祥山宗匠の胸中に去来したものは、如何様なものであったろうかと、名香を目前にして筆者は憶測を巡らしながら、永青文庫を後にした。

三斎流と名香「白菊」は、実に奥深い御縁であって、細川忠興公（三斎）を流祖とする茶の湯の修業を志す者にとって光栄この上もないことである。

頂いた会記を手にしながら、一度だけでも「白菊」の香りを聞いて見たいと、しみじみと追憶にふけった次第である。

九曜会事業報告

〈平成二十四年七月～二十五年六月〉

九曜会総会

平成二十四年七月二十二日(日)
ホテル武志山荘

平成二十四年度総会が会員一〇二人の出席の下盛大に開催された。会長様、宗浦家元様のご挨拶に続き二十三年度の事業及び決算報告、二十四年度の事業計画、予算書の審議が承認可決された。

二階山茶花の間で薄茶席を直門が担当した。

午後は最初に尚子先生より金春流能楽師櫻間右陣様の紹介があり続いて講演が行われた。講演内容については後日講演特集号を発行する予定。

担当　直門

山茶花の間 薄茶席 宗育宗匠 小林会長

○出雲大社亀山茶会

平成二十四年九月三十日(日)

献茶式　午前十時より　於・本殿

宗浦家元の御献茶

北島国造家　奥書院
来客者数　一七九名

【濃茶席】

お茶の道にいる人ばかりお迎えできて、隅々に目を配られ興味を持っていただいたことが会話はなくてもそれとなく以心伝心有り充実した思いでした。水屋方とお運びの方との連携も上手にいき穏やかないたわり合いもあり、よい一日でした。

担当　山本社中

【薄茶席】

北島国造館　亀山会館
参加者数　二三〇名

台風十七号で雨、茶席担当辰村入院中であり、準備、展示品については先生よりの指示をいただいた。子供茶道の席入りがあり和やかな雰囲気であった。水屋の施設は勝手がよく感謝しました。

担当　辰村社中

○松江城大茶会

平成二十四年十月六日・七日
松江城山公園

第二十九回松江城大茶会が十月六・七日に十一流派合同で開催されました。

特に今年は、松江城城山公園や松江歴史館の他に赤山茶道会館も会場となり又、広島県尾道市の速水流光明寺陣幕会の参加もあり賑やかな茶会となりました　当流は席主が森山典子先生で直門が担当致しました。古事記編纂一三〇〇年を記念し神話博しまねが開催されていることから「縁」をテーマにしたお席でした。もちろんお客様との出会いも大切にしたいとの思いから席を向かい合わせに配置し、どこからも点前が見ていただけるように点前座を高くした設えにしてお迎えしました。

又お客様の許可を得て写真を写し待合席に貼付することで同席でなくても顔見知りの方を見つけ縁を深めるといった楽しみも持っていただけたと思います。

二日目は、一瞬でぬかるみが出来るほどの大雨が降ったりしましたが、用意したお菓子が足らなくなるほどの盛況で二日間で約一八〇〇名お客様がお見えになり嬉しく思いました。お客様から「ここの席が一番お茶を美味しく感じました」「素敵なお菓子が出ると聞いてきました」「とても心地よい席で一句詠みましたのでお受け取りください」等々嬉しいお言葉を頂き不手際もあったことと思いますが有り難いことでした。

佐野美紀子
担当　直門

銘 むすぶ

○十六善神を偲ぶ会

平成二十四年十月二十八日(日)
平田本陣記念館
客総数　三四〇名

供茶式　午前十時より

少人数の社中の担当であり家族及び他社中の応援をいただき多忙ではあったもののスムーズに実施できた。

下座(次の間)の床に「会記」をおいたが、道具の説明を求められ席入が続くため繰り返し説明を続けることになった。

常什の道具もお借りし水屋の設備もとても良かった。

点て出しの為席入りは随時あり、献茶　講演後の席入りは特に多く一時混雑した。十名のスタッフではほとんど手を休めることはなかった。

担当　佐藤社中、沼社中

細川光尚公筆「世尊拈一枝花」

○古事記一三〇〇年記念 出雲箒舞台茶席

平成二十四年十一月八日(木)
十五時～二十一時
出雲大社　おくにがえり会館　一階
来客数(席入り・点て出し)四〇〇名

古事記編纂一三〇〇年の記念行事として、出雲かがり舞台実行委員会が設置され金春流櫻間右陣家元が新作能「出雲」を奉納されるに当たり、茶席が設営された。東は東京、西は熊本からと多くの遠来の方や近郊の皆さまをお迎えし、お茶を通し「ご縁」と「絆」を頂いたことに感謝致しました。

神苑という特殊な会場での準備、ウィークデイであり、担当者不足が心配でしたが、直門の皆さまに応援していただき無事ご奉仕出来ました。ありがとうございました。

担当　山田社中、下垣社中、加儀社中、大野社中

○出雲和文化まつり

平成二十四年十一月二十四日(土)
九時～十六時
出雲文化伝承館
来客数　約三三〇名

天気の悪い中、予想以上多数のお客様で点て出しだけなのに、最中にはスムーズに流れないこともあり反省している。

運び出しの順をお菓子を先に出して後でお茶を出していたが、それだと次から次とお客様が入れ替わって最中にはお菓子がまだなのか、お茶がまだなのか分からなくなるときもあり、一緒に出した方が良かったのではと思っている。

この茶会の担当は初めてだったので、いろいろ準備をするものや客入りの様子などわからず少々困った。前回までの報告書を見せてもらっておくべきだったと反省している。

担当　広沢社中、福間社中

宗瑞宗匠・一畑寺管長合筆
花入 新羅須恵器

○三斎忌

平成二十四年十二月二日(日)
法　要　道場書院
濃茶席　松霞亭
薄茶席　富士の間

【濃茶席】

昨年は薄茶席を、今年は濃茶席を担当することになりました。

掛軸は細川怡圓公筆の「香風」を掛けさせていただきました。八角一閑張りの茶入れの基になった尊いお言葉です。香風とは側にいるだけでその人の人柄や気風が漂い伝わってくるという深い意味を知りとても感銘を受けました。銘「国神」の竹一重切の花入れには紅葉一枝に太郎庵の椿を生けておきました。ところが当日の朝そのひとひらの紅葉は潤いを失いかけているではありませんか。茶花という大事な本領を忘れ、姿形だけに目を奪われていた浅はかさにも後悔が残りました。又濃茶はお茶の濃さや練り具合が大切だと思い試しながら水屋の方の稽古もやっていたつもりでしたが、不加減なお茶を出した時もあったのではと反省しました。そしてお菓子の「初雪」も迷った挙げ句の銘でしたが、素朴さに欠けたのではないかと思いました。

今後これらの経験を活かし、平素からの稽古に一層精進していきたいと思っています。

担当　杉原社中

【薄茶席】

参加数　六十二名

観翠庵道場の書院に流祖三斎公の尊像を安置し、菩提樹と茶菓をお供えし、観音寺朝山一玄師により法要が厳修され般若心経、白隠禅師座禅和讃を諷誦し遺徳を偲びました。この日は三斎公の祥月命日に当たり思いを一層深くしました。

十二月には珍しく小春日和に恵まれお茶会が続く中六十名を超えるお参りがありました。

担当　山崎社中

義山老師筆「山雲海月情」

○早春の茶会

平成二十五年三月二十四日(日)
出雲文化伝承館　松籟亭
来客者数　五五二名

全責任を一人で担った茶会は初めてで道具の組み合わせ、会記作りと非常に負担を感じ気をもみました。一番席に宗育宗匠に入っていただき、「シンプルで気持ちの良い席だった」とのお言葉を頂き気持ちが楽になりました。道具にこだわらず、持っているもので心のこもった席を作ることが大切と初めて感じました。お客様に教えていただきスタッフに助けられて大役を果たすことが出来ました。

松籟亭は水屋が広く設備が充実しており作業が楽に出来た。

担当　加茂会、野々村社中

床　細川護熙公御筆　独座大雄峯

○築五十周年記念 新樹の茶会

平成二十五年四月二十九日㈷
【濃茶席】観音寺書院
【薄茶席】観翠庵道場 富士の間
来客者数　百六十八名

今年は築五十周年と出雲大社の大遷宮が重なり、茶席のテーマは自ずとお祝いを意識した設えとなりました。五十年の重みと逆に若さと華やかさを表すため、お点前は今一番伸び盛りの若手三人が担当しました。実は濃茶点前の初デビューでしたが、とても堂々としたお点前で後見しながら驚きました。このような茶席での経験が大きな自信となります。これからの活躍に期待しております。

観音寺書院　濃茶席

宙宝宗宇筆　萬歳

薄茶席は、お点前、後見、お運び等、実質初めて経験する人がほとんどだった。特にお点前は三人共がデビュー戦となった。自主練習も行うなどして本番に臨んだ。

初席の点前はさすがに三人ともが緊張し、動きが硬い場面もあったが、回数を重ねるにつれ慣れていき、それぞれの持前を発揮でき、お客様に美味しいお茶を点てられたと思う。お菓子は女性陣、点出しは男性陣が運びをし茶席の雰囲気作りも奏功するなど、新樹の茶会らしく若々しい、清々しいおもてなしが出来たと思う。

担当　濃茶席・薄茶席　直門

薄茶席 富士の間

薄茶席担当　直門

道場築五十周年 記念事業としての

■記念茶会
■記念改修工事
■家元御献茶

右については一頁～三頁に詳しく記載しております。

○出雲篝舞台呈茶

平成二十五年五月二十六日㈰
出雲大社神苑　担当　さくら会
入席者数　一、三二〇人

○出雲大社おもてなしの茶

平成二十五年六月二日㈰
出雲大社神苑　担当　辰村社中
入席者数　約二、一〇〇人

○第二十七回 出雲大社「平成の大遷宮」大茶会

平成二十五年六月四日㈫～五日㈬
出雲大社神苑（西側北）
来客者数　四日　一、一四五名
　　五日　一、〇七八名

六十年に一度の大遷宮の茶会を社中全員感謝の心で奉仕させて頂くことができました。

日程が変更となり人員確保にどの社中も大変でした。二日間共に一千人を超えるお客様に担当社中全員体制で対応し、お陰様で空梅雨だったため晴天に恵まれ大盛況でした。その反面、真夏日となり水屋の気温は三十五度以上と猛暑の中、水分補強をしながら六社中全員気持ちを一つにして、何とか無事に終えることが出来ました。

お客様の中から三斎流の格調高い点前に多くの方よりお褒めの言葉を頂き、とても誇りに思いこれからの良い励みとなりました。そして坂根屋さんの冷やしたお菓子（笹餅）が大変好評を得て、さらにお茶席を引き立てて貰いましたことも一言付け加えさせて頂きます。

担当　大田社中・安来社中・米子社中
　　大平社中・杉山社中・伊藤社中

○雲南翠木会四十周年記念茶会

記念事業として

■記念誌の発行
■記念茶会

平成二十四年十一月十八日㈰
於　三刀屋 峯寺

献茶式　森山宗浦家元様

昭和四十七年先人達の熱意により雲南翠木会が誕生した。それから四十年。これを記念し、何かの形に残したいとの会員の思いで歩みをまとめた「雲南翠木」の発行と記念茶会を計画した。私は記念茶会担当となり、紅葉の美しい三刀屋の峯寺において記念茶会を行った。

本堂では宗浦家元様による献茶式、書院の間では長板一段での薄茶席（辰村社中担当）、観音堂前では野点席（沼、野々村社中、加茂会が担当）を設けた。前日の準備はあいにくの雨で心配したが、当日は青空の下雨に洗われた紅葉が一層映え、木々の彩り、眼下の町並み、さわやかな風を肌に感じ一服のお茶を楽しんでいただいた。約二百名の方々が来山され、四十周年を祝って頂いたことを会員一同心より感謝し、そして会員同士の絆も一層深まった。これからもますます心を一つにし、雲南翠木会が発展することを願ってやまない。

野々村　和子